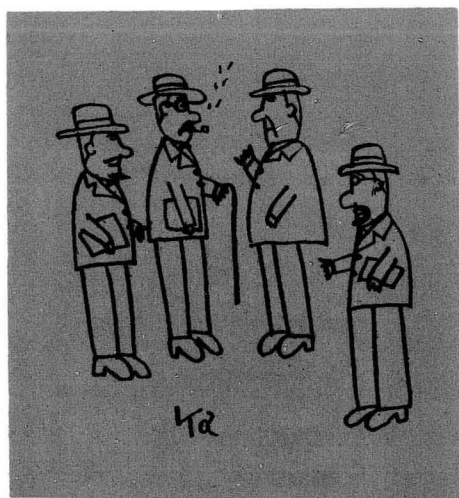


今月今夜の会

源氏鶏太

今月今夜の会

源氏鶏太



こんげつこんやのかい
 今月今夜の会

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十九年十一月十日発行

定価三九〇円

著作者 源^{げん}氏^し 鶏^{けい}太^た

発行者 石渡磨須子

整版者 内田柳次郎

発行所 東方社

東京都文京区高田豊川町六〇

振替東京五七七四番
 電話大塚側一八七三番
 七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

今月今夜の会

源氏鶏太

目次

今月今夜の会

5

家庭が大事

63

停年延長

93

ジ
ン
ク
ス

117

天下の悪法

143

ある結婚

165

東区大手通り

193

社内結婚禁止

209

よかつたね

233

裝
幀

風
間

完

今月今夜の会

毎年三月二十日、新東京実業株式会社営業課長秋沢卓三は、二十名の課員たちに一席を設けるならわしになつてゐた。即ち、二年前のその日に秋沢卓三が課長に昇進したのである。それは昇進というよりも大抜擢だいつてきといつた方がふさわしかつたらうか。もともと出世街道を歩いて来たような男であつた。三十四歳で係長に任命されたのだが、これは何人かの同期生の中でいちばん早かつた。普通には係長を五年勤めてから課長になれたら上等とされてゐた。ところが秋沢卓三の場合、課長が交通事故で急死したという特殊事情があつたにしろ、それから二年目に課長になれたのである。三十六歳の課長というのは、すくなくともこの会社の前例になかつたし、常識としても考えられないことであつた。

社内はそのため沸き立つた。もともと実力のある男であつたし、それを当然とする声と、いくら何んでも早過ぎるという声とが入り乱れた。四十五歳にもなりながら係長にもなれないでいる社員がすくなくない。そういう連中にとつては、殊に面白くなかつた。大きな屈辱を感じたに違いない。しかし、若い社員たちはこの人事に称讃の声を惜しまなかつた。自分たちにもその可能性を感じたのである。

しかし、この人事に誰よりも意外に思つたのは秋沢卓三自身であつたのではなからうか。こんなに早く課長になれようとは、それこそ夢にも考えていなかった。だから部長からその内命を受けたとき、

「あの、私がでしようか。」

と、聞き返したくらいなのである。

「そう、君がだよ。」

部長は、彼の驚愕^{きょうがく}振りをあらかじめ予想していて、その予想通りの反応を示したことに満足そうであつた。

「要するに君の平常からの実力が認められて、社長のこの英断となつたのだ。」

秋沢卓三は、まだ夢心地でいた。

「勿論、僕のすいせんも……。」

「はッ、何んとも……。」

秋沢は、深く頭を下げた。

「そんなことは、まアどうでもいいとして、これからも僕の片腕となつて、大いに働いて貰いたいのだ。」

その瞬間、秋沢卓三は、

（今後は、部長のためならいのちも惜しみません）

といいたい程の心境になつていたが、流石に口には出せず、

「はい、一所懸命に。」

と、答えた。

「よろしく頼むよ、君。」

部長は、彼の肩をボンと叩いた。

秋沢卓三は、もともと平凡に入社試験を受けて入つて来た男であつた。仕事の出来る男であることは、一部で早くから認められていた。しかし、だからといって、上役にお世辞をいつたりするような

ことはなく、特別に出世にこだわつたりするようなところもなかった。性格は、さつぱりしていて、磊落といつてもよかつた。酒は飲むし、飲めば適当にHになる方だつた。そういう意味では、酒場なんかでも嫌われていなかった。金払いだつて悪い方でない。要するに、人間的にも魅力のある方といつてよかつたろう。

課員たちは、彼の課長昇進に心からの拍手を送つてくれたようであつた。彼は、自分の課長昇進を祝つてくれるという課員たちに、逆に一席をもうけて、

「今後、よろしく頼むよ。」

と、挨拶した。

一年目、即ち、昨年の三月二十日にも秋沢は、自分からいつて課員たちを渋谷の料亭に招いた。彼はその席上で、

「若い僕がこの一年間、課長として無難に勤めてこられたのは君たちのお蔭だ。お礼をいつておく。」と、というような意味の挨拶をした。

秋沢は、自分でいつたようにこの一年間を無難に勤めた、と思つていた。いや、無難というよりも立派にといつた方が当つていたろうか。この一年間、営業課の業績は上つていた。課員たちは、そのことを口にしたくらいである。課員の中には、彼よりも年上の男も何人かいた。はじめのうちは若い課長を白眼視していなかつたとはいいい切れない。しかし、秋沢は、そういう年上の課員たちの顔を立てることも常に忘れなかつたつもりである。その心が今では年上の課員たちにも通じて、心から課長と思つてくれているようであつた。

全額自腹を切るのだからゼイタクなことは出来なかつた。料亭の方でもそれを知つていて、一人二

千円で請負つてくれた。それでもチップなんかをいれると六万円からになる。痛くない筈がなかつた。しかし、秋沢は、課員たちの喜ぶ顔を見ていて、かならずしも惜しいとは思わなかつた。同じ課長の中でも、そういう種類の金は一切出さぬ男もいる。たいてい評判が悪い。したがつて、課としての業績も悪い。しかし、だからといって、そういう男の出世が遅れるとは決つていなかった。適当に上役にお世辞をいつたりして、そこはうまくやつているのだ。その点、秋沢は、見えすいたお世辞のいへぬ性分であつた。勿論、孤高を愉しもうなんて思っているわけではなかつた。狷介になることを警戒していた。どんな場合でもサラリーマンは、協調精神を失つてはならないのだと知つていた。が、最後は、人間性と実力が決定すると信じていた。過去たいしたお世辞もいわないで、早くも課長になれたのはそのせいだ、と思ひたかつた。そう思うことによつて、ますます仕事に励みが出てくる。そのためにも課員たちを大事にしなければならぬのである。

秋沢卓三は、一年前の会するとき、

「来年も僕がまだ課長のままでいられたら、来年の今月今夜、やつぱりここでこういう会を開こう。」と、発言した。

課員たちは、大拍手を送つた。今月今夜の会と名づけられることになつた。秋沢は、その席に来ていたこの料亭のおかみに、

「おかみさん、今から予約しておくよ。」
ともいつた。

「たしかにお引き受け致しましたよ。」

おかみは、笑いながらいつて、

「それよりもその今月今夜の会が部長昇進のお祝いということになるといいんですのね。」

と、つけ加えた。

流石に課員たちは、そこまで考えていなかったようだ。急な発言をする者はいなかった。秋沢卓三もてれて、

「部長なんて、とんでもない。かりに僕が部長になれるとしても、後十年はかかるだろうな。いや、それでも早過ぎるくらいだ。」

と、弁解しておいた。

今の部長が部長になつた年齢を考えると、だいたいそういう計算になるのである。何人かの課員たちは、同感だというように頷いてみせた。

更に一年過ぎて、三月二十日が近づいてくると、課の世話役をやつてゐる男が、

「課長、今年も三月二十日に例の今月今夜の会を開いて頂けますか。」

と、念を押しに來た。

「勿論、僕は、そのつもりでいる。」

秋沢卓三は、答えた。

「有りがとうございます。実は、渋谷の料亭のおかみがちゃんと覚えていて、さつき催促して來たものですから。」

「そうか。よろしく頼むといつてくれ。」

「かしこまりました。」

三月二十日になつた。一人の欠勤者もなかった。秋沢卓三は、課長席からそういう課員たちの顔を

それとなく眺めて、

（みんな、今夜の会を愉しみにしてくれているようだな）

と、満ち足りた思いであつた。

（この一年間も無難に課長として通してこられた）

業績は、昨年よりも上つていた。近頃は、部長の機嫌も殊にいいようなのである。

（この分だと俺の実績が認められて、来年の今頃は、部長代理ぐらいにはなつていゝかも知れないぞ）

課長と部長代理とでは、やはり格が違う。部長になるためには、先ず一日も早く部長代理になつておくことである。彼は、案外その日のくるのが近いような気がしていた。そうなつたら社内は、もう一度沸き立つに違ひなかるう。そして、嫌でも将来の重役候補と認めぬわけにいかないだろう。この調子で昇進していけば、この会社の特殊性からいつて社長というのは絶対に無理でも、常務取締役ぐらいにはなれそうである。

（常務取締役！）

想うだけでも、ニタニタつとしたくなつてくる。そのときになつて秋沢は、課員の松石がじいつと自分を見ているような気がした。何か意味ありげであると感じられたのは、彼の気のせいであつたらうか。しかし、松石は、すぐに何気ないように彼から目をそらした。松石は、五年ほど前に部長のコネで特別に入社した社員であつた。そのとき、部長は、

「君に預けるからね。ひとつよろしく仕込んでやつてくれないか。」

と、いつていたのである。

特に有能でも、また、無能でもない平凡な男であつた。が、彼は、部長の言葉もあり、他の課員たちに悪影響をあたえぬように気を遣いながら目をかけて来てやつたつもりであつた。時には、飲みに連れて行つてやつたこともある。

給仕が近寄つて来て、

「課長さん、営業部長さんがお呼びになつておられます。」

「うん。」

秋沢卓三は、すぐ立つた。

二

その夜、渋谷の料亭の二階で、秋沢卓三の課長昇進二年目の今月今夜の会が開かれていた。さつき、世話役の男が立つて、

「本日は、有りがとうございます。昨年このおかみがいったように、今日が課長の部長昇進のお祝にならなかつたのはちよつと残念ですが、しかし、欲をいつたらキリがありませんし、恐らく来年こそ、間違いなしにそうなるであります。が、あれやこれやで、先にカンバイいたしたいと存じます。」

と、いつたのである。

課員たちは盃を上げると、床の間の席に坐つた秋沢卓三に向けて、

「課長、おめでとうございます。」

「課長、有りがとうございます。」

と、口口にいつて飲んだ。

が、秋沢卓三は、一応の笑顔で、黙つて飲んだだけであつた。笑顔ではあつたが、顔面は蒼白になつていた。彼は、叫びたかつたのである。

「諸君、僕は、近日中に営業課長を辞めさせられて、調査役室勤務にされるんだぞ！」

自分でも信じられぬくらいなのだから、これを聞いた課員たちは、どんなに驚くだろうか。ために、せつかくの宴会がめちやめちやになつてしまふ恐れがある。せつかくの楽しい会が、お通夜のよくな会になつてしまふ恐れがある。まだ、課員たちの誰一人として知らないことなのだ。秋沢卓三は、

（俺さえ我慢したらいいのだから、今夜は、男らしく何もなかつたことにしてすましておこう）と、心に誓つていたのであつた。

が、この心の誓いをつら抜くことには、大きな努力が必要であつた。歯を食いしばつていなければならなかつた。さつきの世話役の男の話なんかも、普通なら笑つて聞き流せたことなのである。が、骨身に応えた。いや、屈辱ですらあつた。勿論、世話役の男の責任ではない。ただ自分としては、一年のうちでいちばん愉しく、いちばん得意であるべき今日という日に、あんな重大なことを知らせた部長を恨みたかつた。勿論、部長は、今日が彼にとつてそういう有意義な日であるとはあらかじめ知らないで、あくまで事務的にいつたのであろう。が、どうせそうなると決つていたのなら、せめて明日いつて貰いたかつた。そうすれば今夜だけでも愉快に過すことが出来たに違いないのだ。

秋沢卓三は、酒を飲んだがすこしもうまくなかつた。それどころか、腸がえぐられるような思いであつた。口惜しいのだ。じいつとしていたら涙が溢れて来そうである。しかし、目の前のおよそ二十

名の課員たちは、漸くまわつて来た酒の酔いに、次第に陽気になりつつある。やがて、例によつて隠し芸が始まるだろう。それもいい。当然のことなのだ。何故なら課員たちは、何んにも知つていないのだから。そういう雰囲気の中にいて、彼だけは、全く孤独であつた。かつて、課員たちと自分との間に、これほどの距離を感じたことはなかつた。そして、数日後には、もつとその距離がひろがつていくのだ。彼の今日までは、あまりにも順調に過ぎた。だからといつて、有頂天になつて過ぎて来たつもりではない。自分なりに会社大事に一所懸命に働いて来たと思つてゐる。今、見事にその足許をさらわれたのである。目の前が暗くなり、奈落の底へ転落していくような思いがする。

さつき、部長がいつたのである。

「君は、課長になつて何年になる？」

「今日でちょうどまる二年であります。」

秋沢卓三は、神妙に答えた。今にして思えば、その神妙な答え方の中に、もしかしたら部長代理にして貰えるのでは、との期待がなかつたとはいいい切れないのである。

「そうか、ちようどまる二年か。」

部長は、ちよつど考えるようにして、

「その間、君は、よく働いてくれたよ。」

「いえ……。」

「いや、本当なのだ。業績も上つてゐる。」

「はい。」

「しかし、人間は、馬車馬のように働くだけが能ではない。」